

発情期のある  
ケモノMILKITS娘になった  
彼女と幼馴染の事情

瀬戸こうへい  
イラスト…藻蔵

Story Circle Presents

発情期のあるケモミミT Sっ娘になった彼女と幼馴染の事情

瀬戸こうへい

## 【登場人物紹介】

・坂上学人（さかがみ・がくと）

高校に通う学生。部活動には所属せず。ゲームが好きなインドア派だが、遊に付き合っ外で遊ぶことも多い。運動神経は並程度。

・宮ノ下遊（みやのした・ゆう）

学人とは小中高と同じ学校の幼馴染。子供の頃からアクティブで、学人のことを遊びに連れ回していた。高校では、サッカー部に入りレギュラーを目指して練習に励んでいた。そんなある日、ケモミミ女体化症候群を発症した。

・田中友美（たなか・ともみ）

クラスメイトの女子。面倒見が良く多くの生徒から慕われている。黒髪のロングヘアを普段はポニーテールにしている。



## 第一章 ケモミミになった幼馴染（学人視点）

クラスメイトの宮ノ下遊が学校を休んだ。翌日も、その翌日も登校してこなかった。それどころか、メッセージを送っても既読にならず、電話しても繋がらなかった。

遊とは小中高と同じ学校に通う腐れ縁である。心配になった俺は、直接遊の家に行くことにした。そしたら、おばさん（遊の母親）が出てきて、遊は病気で入院していると説明された。命に関わるような病気ではないとのことだったが、詳しいことは濁された。

連絡が一切つかないことを話すと「少し待ってあげてもらえるかしら」と、おばさんは困ったように言った。

それから丸一ヶ月経っても、遊とは連絡がつかないままだった。俺は再度遊の家を訪問した。応対してくれたおばさんが言うには、遊はもう退院していて部屋に引き籠もっているとのことだった。散々心配させといて、なんだよそれ。会わせて欲しいと伝えると、おばさんは「遊に確認するわね」と言いつて階段を上がっていった。これまでは直接部屋に訪問することも多かったのに、今は話すこともできないもどかしさを抱えて待つ。二階から戻ってきたおばさんは悲しそうに首を振った。誰とも会いたくないらしい……訳がわからない。

それから俺は毎日遊の家を訪れた。その都度おばさんが遊に聞きに行ってくれていたが、遊は俺に会うことを拒み続けた。

そんなある日、スマホに遊からメッセージが届いた。

『もう、ボクに構わないで』

俺はすぐさま返事を返す。

『なんで、そんなこと言うんだよ』

『ボクは変わってしまったんだ。お前が知る宮ノ下遊はもう居ない』

なんだよ、今更厨二病でも発症したのか？

『何言ってるんだか……お前はお前だろ？ 言っとくが俺はお前の親友を辞めるつもりなんてな

いからな。何があったかは知らないけど、悩んだり苦しんだりしてるなら一人で抱え込まずに

俺に相談しろよ。水臭いぞ？』

既読がついて、しばらく間が空いて、

『明日の放課後、家に来て』

と返事が来た。

『わかった』

ずっと途切れていた遊との糸が繋がったことに俺は安堵した。

翌日の放課後、コンビニで遊の好物であるミントタブレットを買ってから、家を訪問する。

おばさんに迎え入れられて、俺は階段を上がっていく。通い慣れた、けれど随分とご無沙汰していた部屋の前までやってきた。ドアは侵入者を拒むようにぴったり締まっていた。俺はドア

をノックする。

「俺だ、入るぞ？」

ノックを繰り返しても返事が無い。試しにドアノブを回してみると、鍵は掛かかっていなかった。不思議に思いながら部屋に入る。

まだ日は高いのに室内は薄暗い。どうやら、カーテンを引いているようだ。

「なあ、遊。居るんだろ？」

返事はない。室内を見回すと、ベッドが不自然に膨らんでいた。

「なんだよ、かくれんぼか？」

ベッドの膨らみに歩み寄って手を掛ける。

「ま、待って!？」

布団の中から聞こえてきた声に違和感。けど、そのまま布団を剥ぎ取った。

「——ひゃひっ！」

「ええと……どなた？」

布団の中に居たのは遊ではなく見知らぬ少女だった。その少女は両手で頭を押さえて小さく丸まっている。

「遊、だ」

「え……？」

頭を押さえていた手が離れて、その下から柴犬のようなフサフサの耳がびよんつと現れた。

「ええ？ ええええ!?」

その耳が意味することを俺は知っていた。

ケモミミ女体化症候群。十万人に一人の確率で思春期の男性にのみ発症する病気である。発症した男性はケモミミ美少女になる。

十年くらい前から突然世界的に発生するようになった奇病で、原因は不明。ケモミミになった場合、基本的には人間の女性と似たような生態になるが、特徴的な違いがふたつある。ひとつは外見的な特徴であるケモミミと呼ばれる動物に良く似た耳が頭部に生えること。そしてもうひとつの特徴は、生理の代わりに発情期があるということだった。

発情期は二、三日続き、その間ケモミミは、理性を失うほど性的に興奮してしまうらしい。この体質のせいで、病気が判明した当初はいろんな行き違いや無理解による不幸が発生して、社会問題となった。そのうちテレビやYouTubeで発信するケモミミの人が出てきたりして、病气への理解が進んで、受け入れる社会や法制度ができていった。

——というのが、俺が小学校の頃に保健の授業で習った知識である。思春期の俺としてはケモミミ美少女に発情期があるなんてエッチじゃん、くらいの認識でしかなかった。

リアルでケモミミの人と話したことが無かったからというのもある。ケモミミの人と接する機会は年に数回、街中で見かけるくらいだった。







だから、目の前にある美少女の頭の上でびよこびよこ動くリアルケモミミに、俺は目が釘付けになった。

「なあ……その耳触ってもいいか？」

「……へ？」

遊はぽかーんと俺を見上げていた。つまり、オツケーってことだな。

「おー、ふさふさじゃん」

本当に犬みたいだ……素晴らしい。

わしわし。

すべすべで良い毛並みだ。昔、家で飼っていた柴犬の大五郎のことを思い出す。

「……ボク、触っていいなんて言っていない」

「あー、そうだったか？」

わしわし。

これ、癖になる感触だ。柔らかくてほのかに温かいのが心地よい。

「……いっ」

いいのか？ 気持ちいいのか？

いくらでも撫でてやるからな、ほれほれ。

「いい加減にしろーっ!!」

あ、手を跳ね除けられてしまった……

「いくらお前が動物好きだからって、親友の心配より自分の欲求を優先させんなし!」

「だって……」

「言い訳すんな!? ボク、すごく悩んでた! お前に拒絶されたらどうしようって。ずっと、ずっと——」

「……馬鹿だな」

そんなことで悩んでたのか。

「姿や性別が変わったくらいで、俺がお前の親友をやめる訳ないだろ」

「が、学人……」

「それより、本当に心配したんだからな。一切連絡もつかないし、お前にもう会えないんじゃないかって」

「……すまない」

「お前が無事だったならいいさ。悩んでるんだろ? お前のこと、俺に話してくれよ」

手土産の事を思い出して、ミントタブレットが入ったコンビニの袋を遊に押しつける。

「あ、ありがと……」

お礼を言って受け取る遊。袋の中を確認すると、耳をぴよこんとさせて目を輝かせた。

「タブレットだあ!」

袋の中から容器を取り出して、包装のビニールを外す。そして——中身を手のひらにどぼつと出して、それら全部を一気に口の中に放り込んだ。そのまま、ぼりぼりと噛み砕く。

「うわぁ……」

……うん、こいつは遊だ。ミントタブレットをラムネ菓子のように食べるやつなんて、早々いないだろう。

「学人はケモミミについて、どれくらい知ってる？」

「授業で習ったくらいだな」

「じゃあ……まずは、これを読んでみてよ」

「よつと」

投げて寄越されたのは小冊子だった。表紙には『ケモミミになったあなたへ』と書いてある。どうやら、ケモミミになった人用の冊子らしい。

パラパラとめくる。最初の方は保健で習ったことと同じ内容が、より具体的に書いてあった。人間関係や周囲との関係に悩んだときはこちら——という電話番号の案内が繰り返し書かれていて生々しい。そして、半分くらいが習っていない内容——ケモミミに来る発情期の詳細について書かれてあった。

発情期のケモミミは、常人では我慢できないほどに性欲が昂る。欲求を抑えるには、繁殖衝動を満たす必要がある、その為には異性（男）とセックスしないとイケない。

それから、過去ケモミミになった人に起こってしまった不幸な事件の紹介が続く。街中で発情期が来てしまい、通りすがりの男性複数に輪姦されて妊娠、ショックの余り自殺してしまった人。性欲を耐え続けて、心が壊れてしまった人。我慢できずに街中に飛び出して、男性を逆レイプしてしまった人——等々。

結論として、発情期を乗り越える為の性欲処理は必要なことだと締められていて、男性のパートナーを作ることが推奨されていた。そして、パートナーの居ないケモミミには、国からの補助で介助人を雇う制度があるとのことだった。これは、いわゆるセックスボランティアである。介助人には厳しい守秘義務が課せられており、利用者のプライバシーは守られると謳われていた。ご丁寧に利用者の声まであって、その中には、女性の恋人がいて発情期には介助人に性欲処理をお願いしているという人の話もあった。

「これは……」

想像を超えた内容に言葉を失う。

「なかなかキツイだろ？　これが、ボクの現状なんだ」  
遊は自嘲気味に笑う。

「介助人は頼まなかつたんだ。男に抱かれるなんて絶対に嫌だったから」  
「まあ……そうだよな」

当然だろう。そんなの俺だって嫌だ。



「でも、今は……正直、迷ってる」

「え……？」

遊から出てきた予想外の台詞に戸惑う。こいつは女好きで間違いない筈。お互い経験こそ無かったが、男同士の下世話な会話は何度もしてきて性癖はお互い熟知している。

「……来たんだ、発情期が」

遊が感情のない言葉をこぼす。

「三日間ずっと身体が疼いて、セックスのことしか考えられなくなってた。自分でしても全然治まらなくて……気が狂いそうだった」

思い出しながら語る遊は、目が澁んでいた。美少女がオナニーしたと告白するのに、いやらしい気持ちになんて一切ならず、ただ痛々しい。

「全裸で家を飛び出したら男に犯して貰えるのかなって、何度も考えた。相談のダイアルに電話したら介助人を緊急手配して貰えるんじゃないかとも……もし、あの時、目の前に男がいたら、きつと、誰彼構わず入れて欲しいってお願いしてたと思う」

まるでエロ漫画だよ、と遊は暗く笑う。

「それでも、一度は乗り切った。けど、これで終わりじゃ無い、毎月これが繰り返される。そう思ったら、心が折れそうになるんだ。だったら、いつそのこと——」

「早まるな！ 死ぬなんて考えるんじゃないぞ!」

さつき読んだ自殺した人のことが頭に過って、俺は思わず叫んでいた。けど、俺の声は遊の心には響かなかったようだ。遊は表情の無い顔のまま俺を見て言う。

「……ねえ、学人はなんでボクに『死ぬな』なんて言うの？」

「おばさんが悲しむだろうが……それに、俺だってもちろん悲しむ」

「でも、ボクはこれから何十年もこの体で生きていかなきゃいけないんだよ？ 見ず知らずの男に縋らないと、まともに生活すらできないこの体で」

遊は自分の胸元に手のひらをあててTシャツごとぎゅっと握りこむ。

「サッカー部の練習も全部無駄になった」

こうなる直前まで、遊はレギュラー選考まであと少しだからと、遊ぶ時間も惜しんで部活の練習を頑張っていた。

「学校にも行けやしない。行けば、晒し者になるに決まってる！」

遊の抱え込んだ心情が吐露されていく。突如としていろんなものを失ってしまった遊の不安と絶望。

「でも、そんなの学人には関係無いだろ！ それなのに無責任なこと言わないでよ！」

正直、遊の言っていることは八つ当たりだ。けど、それを指摘しても仕方ない。理不尽だとしても、遊はそれ以上に理不尽な仕打ちを受けて傷ついていた。そして、俺はそんな遊の力になりたかった。

「関係なくなんかねえよ……俺はお前の親友だ」

「だったら、何だって言うんだよ！　ボクと変わってくれたりするの!?　それとも一緒にケモミミになってくれるの!?　そんなことできる訳ないだろ！」

俺は何があっても遊を見捨てたりなんかしない。その覚悟をわからせないといけない。どうすればこいつに届く？　言葉だけじゃダメだ。俺がケモミミになった遊にできること……何かないのか。

——そうだ。

「俺がお前のパートナーになってやる」

「……へ？」

「見ず知らずの介助人を頼る必要なんかない。お前がその体質に何十年も苦しむってのなら、俺がずっと一緒に付き合っただけでやる」

「な、何言ってるんだよ。そんなこと、できるわけないだろ！」

「なんで？」

「なんでって……だって、ボクだよ!?　学人はボクとできるの!？」

「ああ……お前を助ける為に必要なら、それくらいできるさ。お前が男のままだったとしても、それが必要ならやってやる」

「ええ……」

待て、なんでそこで引く。俺だって別に男同士でいたい訳じゃないぞ？

「それに、そのへんは問題ないだろ。今のお前かわいいし」

「なっ……!?!」

ケモミミがぴーんとなって顔が真っ赤になる遊。うん、かわいい。イケる。

「ずっと付き合うって言うけどさ。彼女とか結婚とか、将来のことはどうするつもりだよ？」

「んー？ まあどうにかなるだろ。事情を説明して、その辺り理解してくれる人と付き合うとかさ」

「いや、どうにもならないと思うけど……」

「それともお前が嫌か？ 他人の方が気兼ねしないのなら、無理強いするつもりはないぞ」

「……嫌、じゃない。見ず知らずの相手よりは、学人の方が抵抗は少ないと思う、けど……」

「じゃあ、決まりだな」

「ちよ、勝手に!?!」

「これで俺はもう無関係じゃなくなつたろ？ だから、もう泣くな」

「ふへ!?!」

本人も気づいてなかったらしい。遊の頬には、涙が溢れていた。遊は慌てて手でぐしぐし拭く。

「うう……あれ、どうして……あう、止まらない……」



ずっと孤独と不安で心が休まることがなかったのだろう。緊張の糸が切れてしまったらしく、遊は涙を次々に溢れさせていた。

「ちよ…!？」

俺は無言で遊を抱きしめた。ふわりとした甘い匂いが鼻腔を撫る。

「こら、学人、やめろって…もう」

遊は少しの間ジタバタと抵抗していたが、やがて観念したのかおとなしくなった。抱き寄せると、逆らわず体を預けてくる。

それからしばらくの間、室内には嗚咽の声と鼻をすする音だけが聞こえていた。

…随分小さくなっちまったな。

遊はもともとクラスの中でも小柄な方だったが、ケモミミになってさらに小さくなっていた。回した両腕の中にすっぽりと収まってしまっている。

…こんな体で本当にできるのだろうか。

先のことを考えてすこし心配になった。

手持ち無沙汰なので、眼前のケモミミを撫でる。遊は嫌かもしれないけど、この撫で心地は本当に素晴らしい。

気がついたら遊は眠ってしまった。すーすーという規則的な寝息が聞こえてくる。

俺はそのままもう少しだけ抱き心地を堪能してから、遊をベッドに寝かしつけて部屋から出

た。ケモミミになった遊は驚く程軽かった。

一階に降りてリビングに顔を出すと、おばさんが心配そうにしていた。少しだけ迷ったけど、包み隠さず全てを話すことにした。

発情期の遊の相手を俺がするという話をしても、おばさんは反対しなかった。むしろ、子供の頃から知っている俺なら安心だと言ってくれたので安心した。

ただ、俺に恋人や好きな人ができたときは、遊との約束より自分のことを優先させることを約束させられた。本当にそうだったとしても、俺は遊を優先させるつもりでいるけれど。

もう一つの条件として、俺の両親に許可を取るように言われた。大げさだと思ったが、未成年である俺の将来に関わることだからと言い聞かされた。

許可が得られたら、おばさんはうちの両親に挨拶するらしい。遊の家とは昔から家族ぐるみの付き合いだったから、親同士で連絡取り合ってくれるのがせめてもの救いだらう。

俺と遊がお互いの親に挨拶して、これから二人はセックスするのでよろしくお願いします、なんてのは、どう考えても気まずすぎた。

その日の夜、両親に簡単な事情を説明して、遊の母さんから連絡があるからという話をした。両親に具体的にナニをするとかの話はしなかったが、ケモミミになった遊を助けるという説明で事情は察してくれた。そして、割とあっさり許可してくれた。

それから、毎日放課後は遊の家に通うようになった。学校のノートを貸して勉強を教えたり、ゲームをしたり流行りのスマホゲーの話をしたりとか、男の頃と変わらない距離感で、のんびり過ごしていた。男だった頃の遊は放課後にサッカー部の練習をしていたので、話す機会はむしろ以前より増えているくらいだった。

外に遊びに行くことは無くなったけど……遊は入院していたときに病院のロビーで周りからジロジロ見られたことで周りの視線が怖くなり、外出ができなくなってしまっていた。

それでも、家の中では笑顔も増えていたから、このままゆっくり癒されていけば良い……そう思っていた。

けれど、思ってたよりも早く、その日はやってきた。

『来た』

午前の授業中、遊からメッセージが入っていた。

『大丈夫か？』

『うん』

少し間を開けて続きが来る。

『なるべく早く来てくれると助かる』

決して楽では無いのだろう。直ぐにでも駆けつけたくなるのを我慢する。

「わかった……耐えられないようなら呼んでくれ」

『いいから、ちゃんと授業受けて』

俺はやきもきしながら授業を受けた。

そして放課後、全力で走って遊の家に駆けつける。玄関で出迎えてくれたおばさんは難しそうな顔をしていた。

「ちよつといいかしら」

そう言われてリビングに招かれる。リビングのテーブルに向かい合わせで座ると、黒いビニール袋を手渡された。

「これ、約束のやつよ」

少し気まずい思いで受け取る。袋の中身はコンドームの筈だった。必要になる物なので、おばさんの方で用意すると言われていたのだ。結構な重さがあり、大量に入っているのが窺えた。

「あの子は使わないことを望むかもしれないけど、学人くんの方でちゃんと断ってね」

「は、はい」

「準備できていない状態で子供ができちゃうと、不幸な結果になりがちだから」

「……わかりました」

発情期のケモミミは本能で中に出されることを望むらしい。そして、普通の女性よりもかなり妊娠しやすい。避妊しなければ子供ができてしまう危険性は高いのだそう。少子化に対す



る種の突然変異だとかいう研究も出ているようだった。

「……あの子をお願いね」

お婆さんは遊のことが心配で仕方ないのだろう。

「ええ、遊は親友ですから」

少しでも安心してもらえるように、俺は笑って答えた。

リビングから出て廊下から階段に。トントンと折り返しのある階段を上がっていく。頭の中がふわふわしていた。

これから童貞を卒業？ 相手は遊？ ……まるで現実感が無い。

二階の廊下は短くて、直ぐに遊の部屋の前に辿り着く。いつものようにノックして、「入るぞー」

ドアを開けて部屋に入る。

部屋全体に立ち込めている甘ったるい匂い。それだけで、体が熱くなる。

遊はベッドの上に座っていた。黒のスパッツは腰のあたりが着崩れていて、汗ばんだTシャツが肌を透かしている。これまで意識しなかった女という性を、強制的に脳に刻み込まれる。飾り気のない男物の服が逆にエロかった。

「学人……来てくれたあ……」

頭の上のケモミミがぴよこんと跳ねた。遊は潤んだ瞳をこちらに向ける。

「……大丈夫か？」

ベッドに近づくとつれ強くなる、甘いにおい。頬が熱くなり、頭がくらくらする。

「ん……ダメっばい」

上目遣いでじーっと見上げてきて。

「発情期が始まってから、お前のことで頭がいっぱいなんだ。お前のチンコを入れられたら、どんな風になるんだろうって……そればかり考えてた」

切なげにそんなことを言われたらたまらない。下腹部に熱が入る。

「その……準備は大丈夫だと思うから……もう、入れてもらっていい？」

俺の返事を待たずにスパッツごと下着を脱ぎ捨てる。白い肌が視界に飛び込んでくる。

すらりとした太腿、小ぶりの尻、目が釘付けになって離せない。

「すごい顔になってるね……ふふっ」

俺の視線に気づいた遊が嬉しそうに笑った。自分の心臓の鼓動がうるさい。

「んっ……」

じっと上目遣いで俺を見つめたまま、少し恥ずかしそうにゆっくり足を開いていく。

産毛も確認できないくらい白いお腹は、なだらかな曲線を描いており、その先にはシンプルな縦筋が確認できた。

初めて見る女性のそこは、ただただ綺麗で。ぶにととして、柔らかそうで、ここも一切毛は生えていないらしく、なんだかとても犯罪的だった。

遊が両足を開くにつれて陰裂も広がって、花の蕾のような中が曝されていく。サーモンピンクの内側は、既にしっとりとした湿り気を帯びていて、遊が指を添えると中からとろりと蜜がこぼれ落ちてきた。

その淫靡な光景に心を奪われていると、遊は恥ずかしそうに顔を逸した。

「……ボクばかりずるいよ」

「あ、ああ……」

慌ててズボンとトランクスを脱ぎ捨てる。刺激の強すぎる光景に、俺のペニスはもう準備万端だった。

「勃ってる……」

流石の親友でも勃起したモノを見せるのは初めてのことだ。俺はそそり立った剛直を遊の眼前に見せつけるように晒す。

熱い視線を注がれるのが心地よい。

「すごい……ボクのより、全然大きい……」

男の頃でも遊とは体格差があったので、俺の方が大きいのは意外でもない。それでも、男のシンドルのサイズで勝つていられると言われて悪い気分はしなかった。

「どうしよ……これ、入るのかな？」

遊の顔が若干強張っている。そうか、入れられる方だと大きければ良いという物でもないか。

「あう……こんなの入れられちゃったらボク壊れちゃうかも……」

言葉とは裏腹に遊の目は潤んで、物欲しげな吐息をこぼす。

恐る恐る手が伸びてきて。指がペニスに——触れた。産まれて初めて他人によって与えられる刺激はとても甘美で、思わず声が漏れる。

「……気持ちいい？」

そのまましゅりしゅりと手を上下運動させてくる。気持ちいいツボを押さえているのは、扱いに慣れているからだろう。

遊は両手で丁寧に逸物をしごく。小さくて柔らかい指を滑らかに動かして、快感を引き出す。ペニスは今まで見たことのないほどパンパンに腫れあがり、血管が浮き出していた。それを仰ぎ見た遊は、ケモミミをへにゃつと寝かして、切なげに乞う。

「もう、我慢できない。入れて……？」

「わかった」

俺はビニール袋からコンドームの入った箱を取り出した。ギザギザのパッケージを手にとって封を破り、ペニスにくるくる巻きつけるようにして装着する。その間、遊は俺の様子をじつと見ていた。ちよつと残念そうに見えるのはきつと気のせいだろう。

ゴムを装着して遊に向き直る。仰向けに倒れ込んで、僅かに両足を広げた状態で俺を待っていた。両足の間に入体を入り込ませて、体で足を開いていく。

「……っ」

手で誘導して先っぽを割れ目に擦り付けた。ぷにっとした感触が亀頭に触れる。柔らかく湿った肉の感触。割れ目に沿って肉棒を前後に滑らせる。ちゅくっとな音がして、ぬるぬるした温かい粘膜が裏筋をなぞった。ぴりっとした電撃のような快感が脳裏に走る。

「んっ、あっ、ふあ……っ♡」

そのまま擦り付けていると、動きに合わせて喘ぎ声が聞こえてきた。遊も気持ちよくなっているんだと分かって嬉しくなる。

そして、ついにそのときを迎える。手で角度を調整して、ペニスを未踏の幼孔に沈めていった。

「——♡♡」

入るだろうか心配したのは杞憂で、遊の発情したおまんこはずぶずぶと剛直を飲み込んでいった。ぐにぐにと蠢く肉ひだが、ペニスをぎゅっとならえて吸い付いてくる。それが、ひたすらに気持ちいい。腰を進めて、奥へ奥へと侵略していく。やがて、先端がこつんと肉のペツドに当たった。

「んんんっ——♡♡♡」



その瞬間、遊ががくがくと小刻みに震えて、それに合わせておまんこが、きゅんきゅんと締まる。搾り取ろうとするような動きに不意を突かれ、思わず精を吐き出してしまいそうになるが、俺は歯を食いしばってなんとか堪えた。

「……大丈夫か？」

遊はまだ小刻みに震えている。

「ダメえ……落ち着くまで待つて」

手で顔を隠しながら懇願する遊が愛おしくなつて、俺は頭の耳を撫でる。途端、

「あつ、学人……ふあつ……んんっ——♡♡」

両腕の中で遊がピクンピクンと跳ねた。慌てて手を離す。

「うう、待つてつて言ったのに……」

遊が涙目になって睨んでいる。

「いや、頭を撫でただけなんだが」

「入れられたままなのに、そんな顔して優しく撫でられたら無理だよ。ばかあ……!!」

「す、すまん」

何が無理かはわからなかったが、とりあえず謝っておく。

「ん……じゃあ、もっと撫でて？」

よくわからん。再び撫でると目を細めて気持ち良さそうにしていた。こいつ本当に犬みたい

だな……まあ、犬ならこんな格好でセックスはしないか。

「……ありがと、もう平気だと思う。待たせてごめん」

「気にするな」

俺も正直やばかったし……と、言わないのは男の見栄だ。それに、こうして繋がったままでいるというのも満たされる感じがした。とはいえ、この蜜壺を掻き回したいという欲求はもちろんある。許可も出たことなので動くことにしよう。

「んんっ……♡」

腰を引くと中の肉ヒダがうねうねと吸い付いてきて、逃すまいと蠢く。まるで、亀頭にキスされているかのようだ。

「んっ♡ ふぁ……♡ んんっ……♡」

腰を突くとずぶずぶと絡みつく肉壁がペニスを飲み込んでいって、やがて最奥の柔らかい肉壁に行き着く。

「あう♡ あっ♡ あんっ♡ ふぁ♡ あぁ♡」

その行為を繰り返して、遊のおまんこを俺の肉棒に馴染ませていく。頭が馬鹿になりそうなほど気持ちいい。ベッドのspringがぎしぎしと鳴る。

「んっ……♡ あっ♡ ふぁっ♡ んんう♡ ふぁ♡ あぁ♡ くう♡ ……ふぁぁ、気持ち、いいよお♡♡ んっ♡ はう♡」

ゴム越しでも判るほど、遊の膣内は熱く火照っていた。出し入れする度に俺のペニスの形を覚え込んでいる。とろとろに柔らかくなっているのに締めつけは増すばかりだ。

「んんう♥んっ♥あっ♥ふぁ♥はう♥あっ♥ふう♥」  
精巣からぎゆるぎゆる精液が昇ってくる。コンドームで感覚を鈍らせていなかったら、すでに果てていただろう。

「んっ♥あっ♥はう♥んんっ♥」

脳を揺さぶる遊の嬌声。俺は本能のまま腰を振り快感を求めた。急激に射精感が込み上げてきて分水線を越える。

「お、俺……もう！」

「うん、来て……♥ボクも、んっ♥ふう♥いきそう、だから♥んっ♥ふぁ♥」

後はただ気持ちのいい射精をする為にひたすら腰を振る。遊の腰を両手で固定して、夢中になってペニスを何度も蜜壺に抽挿する。

「遊っ！くう……！ダメだ！出るっ！いくっ！いくうっ……！！」

「ん♥んっ♥んんんー♥♥」

腰を強く掴んで、一番深いところに腰を押し込んだ。

「……………」

頭の中がチカチカして。はじけた。

どびゅ！！

どびゅびゅ！ どぶっ！ どひゅ！

「ふあああああああ♥♥♥♥♥」

膣の突き当たりでペニスに精液を勢いよく注ぎ込んでいく。魂まで抜け出てしまいそうな放出。体が壊れた機械のようにガクンガクンと震える。

どくっ！ どくっ！ どぶっ！ どびゅ！

「んっ♥ んんっー♥♥♥♥」

見れば遊も体を小刻みに震わせていた。彼女もイっているのだろう、目をつむって耐えるように歯を食いしばっている。

どびゅ、どびゅる、びゅびゅる！

「んあ♥ んっ♥ んっ……♥♥♥」

ケモミミがひよこひよこしている、かわいい女の子。その体内に思うがまま精子をぶちまける快感。自分でも意識していなかった本能的な征服欲が満たされていく。

どびゅ……どく……どぶ……

「ふあ……♥ あっ♥ ふう……♥♥」

ようやくポンプの勢いがおさまってきた。これまでの人生で一番気持ちいい射精だったと言いつける。息を吐いたら、全身から力が抜けていった。両肘をベッドについて体を支える。目





の前には目を閉じて息を整えているケモミミ少女の姿。近い。

「ん…♥ ふう…♥ ふう…♥」

…思わず見惚れてしまう。

「…って、なに見てるのさ!？」

「いや、かわいいなって」

「はあ!? な、何言ってるんだよ! ポクは男だぞ!？」

「いや、今は女じゃん」

いまだ繋がったままの下半身を見下ろしながらそう言うと。

「ば、馬鹿あ! 見るな! ……ふあ♥」

遊は抵抗しようとジタバタして、入ったままのペニスがいいところに当たったらしく身を悶えさせる。ちなみにまだまだ硬さは十分だ。

「うう…:くう♥ 動くなあ…:♥」

軽くうごかすだけで、びくびく反応する姿がかわいい。愛い奴。

「初めてのセックスすげーよかった」

「…:ポクも、気持ちよかった」

「落ち着いたか？」

「うん…:おかげさまで発情は抑えられたみたい」

「そっか……」

「何だよ、その微妙そうな反応は」

「ええと……その、だな……もう一回したい、ダメか？」

「……」

遊は顔を真っ赤にして頷いた。

それから、追加で三回戦した。俺は初めての経験に夢中だったし、発情期の遊は回数をこなす毎に感度が上がっていき、最後の方は何度達したのかわからないくらいだった。

俺たちは完全にセックスの虜になっていた。下手するとそのままどちらかが力尽きるまで、やり続けていたかもしれない。そうならなかったのは、射精後冷静になっていたときにスマホのランプが点いていることに気づいたからだ。見ると遊のお母さんから、『ご飯ができてるからキリが良いところで食べに降りてらっしゃい』というメッセージが3分以上前に入っていた。時刻は完全に夜になっていた。

遊の方にも同じメッセージが来てたみたいで、どうしようと二人で顔を見合わせた。

二人共全裸だったのでまず服を着る。なお、遊の下着はユニセックスな黒のボクサーブリーフだった。他もサイズを今の体に合わせた男物の部屋着で、服を着ると一気に少年っぽい雰囲気

気になる。

「……なんだよ、じっと見て」

先程まであれだけ女の顔をしていたのに不思議だ——なんて思ったことを素直に言うのは、流石に無神経すぎると思ったので、

「おばさんになんて言い訳しようかなって考えてた」と誤魔化した。

「……その、一回だけして、その後はずっとゲームしてて夢中で気づかなかったとか」

「通じると思うか？」

「……思わない」

「じゃあ、諦めるか」

別に後ろめたいことはしていない。ちよつとその……夢中になって時間を忘れてしまっただけだ。服装を整えた俺たちは、二人で階段を降りる。

「……ボク、臭くないかな？」

「大丈夫だと思うぞ？」

俺がそう言っても、遊はにおいを気にしていた。ケモミミになると五感が強くなるらしいので、そのせいかもしれない。

台所に入るとおばさんが笑顔で迎えてくれた。テーブルにはご飯が用意されていて、おばさ

んが冷めてしまった料理をレンジで温めてくれる。

「す、すみません」

俺が謝ると、

「いいのよ、気にしないで」

とおばさんは嫌な顔ひとつしなかった。

「それにしても頑張ったのね……二人ともお疲れ様」

「か、母さん！」

俺の後ろに隠れるようにしていた遊が顔を横から出して抗議する。

「遊、体は平気？」

「う、うん……ちよっと体が痛いけど、それ以外は大丈夫」

「それは良かったわ。学人くんにお礼は言った？」

「いや……ありがとう、学人」

「そんな、お礼を言われるようなことなんて」

正直、役得しかなかった気がする。

「いや、ほんと助かったよ。発情期なのに今は心も体も普段以上に落ち着いてる。それが、どれだけありがたいことか」

「そっか」

感謝されると逆に申し訳なくなる。途中から、自分が気持ちよくなることしか考えてなかった気がするので。

それから、おばさんが準備してくれた晩御飯を二人で食べた。

「学人くんはこれからどうする？ 家に泊まっていけば？」

「いえ、それは……」

「あら、昔はよく泊まってたじゃない」

「いや、あの頃とは違いますし……その、遊にも迷惑になると思うので」

今日この家に泊まったら、暴走せずにいられる自信がないです。

「この子は喜ぶと思うけど……」

「か、母さん！」

顔を真っ赤にした遊が母親に食ってかかる。娘の抗議をおばさんは笑顔であしらっていた。

「親御さんに話はしていますから、いつでもお泊まりしていいですからね？」

「か、考えときます」

魅力的な提案ではあるが、とりあえず今日は帰ろう。一度冷静になって頭を冷やしたい。

ご飯を食べ終えて、遊の家を出た俺は夜道を歩いて自宅に帰る。ふとした拍子に、自分の体に残った遊のにおいの残滓を感じて、股間が反応しそうになった。あれだけ出しておいて節操のない息子である。



まだ、発情期は二日ある。繁殖欲求は一日くらいで再び復活するみたいなので、明日の放課後には遊の家を訪れてセックスする必要がある。そう、必要なことなのだ。あいつは望んでこんなことをしている訳じゃない。それなのに、ただ自分の欲望を満たすことだけを考えてしまっている自分が情けなかった。けど、俺とセックスすることであいつが救われるのも事実であり、どうこう言ってもすることは変わらない。

脳裏に思い浮かぶあいつのにおい、あそこの締めつけ、表情、そして甘い声。

「あー、ちくしょー」

やっぱり、泊まっておけば良かったかな……俺は早速後悔していた。

そして、帰宅。リビングに居た母さんに軽く挨拶だけして、逃げるように風呂に入った。何を言われても気まずいので、今日はそつとしておいてほしい。そのまま自室に戻りベッドに潜り込んだ。悶々として眠れないかと思っただが、流星に肉体は疲労していたらしく、眠気はすぐにやってきた。

## 第二章 ケモミミになったボクの事情と情事（遊視点）

ボクは目を覚ます。昨晩は眠れるかどうか心配だったけど、いつの間にか眠っていた。疲れていた分余計なことを考えずに済んだのだろう。

昨日のことはボクにとって衝撃的すぎた。学人との初めてのセックスにボクは我を忘れた。数えきれないほど絶頂を迎えて、思い返しても夢のようにふわふわした記憶の断片しか残っていない。

「このベッドで……したんだよね」

ボクはシーツを引き揚げて顔を覆う。シーツは昨晩寝る前に母さんが替えてくれたので、行為の残滓は一切残っていない。そのことがちよつと残念に思えた。学人を感じたかった。

「……重症かも」

そんな風に学人を恋しく思うなんて今まで無かった。昨日、ボクの世界はがらりと変わってしまった。ある意味この体になった日よりも大きい変化。

「一回エッチしたただけでこれとか……チョロすぎやしないか、ボク」

困ったことに、そのこと自体不快ではなかった。戸惑いは覚えるけど、それだけだ。

枕元に置いてあったミントタブレットのケースを手取る。外に出られないボクの代わりに学人が毎日コンビニで買ってきてくれている物だ。もちろんお金は出しているけど、ボクの気

分に合わせた組み合わせを買ってこられるのは、自分以外だと世界で学人だけだろう。

容器を顔の上に掲げて、ぱらぱら落ちる粒を口で受け止めて、そのままぼりぼりと噛み砕いた。口内がミントで満たされて脳が覚醒していく。

夜の間にお腹の下に重い感じが溜まっていた。発情の兆し。夕方にはまたこらえきれないほどの衝動がやってくるのだろう。けど、今は以前のような不安は無い。その頃には、学人が来てくれるからだ。

昨日のことを思い出して体が疼く。あの感覚はヤバイ。まるで、炎天下で走り込みをして、カラカラに喉が乾いたときに渡されたスポーツドリンクみたいな体に染み入る感覚。体中が満たされる多幸福感。

自分が自分じゃなくなってしまいそうなほどの快感。けど、学人と一緒だったから、怖くはなかった。

介助人を頼んでいたらどうだっただろう？ あそこまでの安心感は無かったのは間違いない。逆にあそこまで箍が外れることもなかったのかもしれない。

「……どっちが良かったのかな？」

ボクにはわからない。けど、わかるのは学人に抱かれてしまった今、他の人に抱かれるのは嫌だということ。一昨日までは男に抱かれること自体にすごく抵抗があった。本音を言うと、学人相手でも嫌だった。だって、ボクは男だったから。性別が変わったからといって変わらな

い。そう思っていた。

けど、昨日の経験は、ボクの中の常識を一気に洗い流してしまった。

今は学人に抱かれるのを一日千秋の思いで待ち続けている。これは発情期だから——なのだろうか？ 一過性の物で発情期が終わったら今まで通りのボクに戻れるのか。学人との関係は元通りになるのか。色々と悩みは尽きないけれど、学人の事を考えていると知らず知らずのうち、思考がピンク色に流されてしまう。

……もう、ダメダメだ。発情期に真面目な事を考えるのは諦めよう。

学人に抱かれたかった。いきり立ったペニスに貫かれて、体の芯を抉られる快感に、あの甘美な時間に浸りたい。

「ん……」

自然と手が股間に向かう。下着の上から触れると既に外側まで染みができていた。指を前後に動かす。

「ん……♡ ふう……♡ はあ……学人……♡」

この行為では発情期の衝動を抑えられない。けれど、昨日のことを思い返すと、自然と指が動いていた。

「——ん♡ ふあっ……♡ くううう——♡♡」

数分で軽い絶頂を迎えて、けれどすつきりすることなく欲求不満が増しただけで。やっぱり

満たされないことにため息をつく。

「……学人じゃないとダメなんだ」

浅ましいと思う。いくら体質によるものと説明されたって、以前の常識を簡単に捨てられる訳じゃ無い。本当は学人じゃなくても大丈夫なのかもしれないけど、ボクがもう他の人を考えられなかった。学人に依存しきっている自分のダメダメさが浮き彫りになる。幸い学人もボクとのセックスは嫌じゃなさそうなのがせめてもの救いだった。求められるのは嬉しい、例え体だけだとしても。

ボクも男だったから、学人の気持ちはわかってるつもりだ。抱きたい相手と好きな相手は違うのが男という生き物である。心と体は別物。セックスするようになっただけで、ボクとあいつの関係は親友のまま変わらない。

なのに、心のどこかが引っかかっているのは何故だろう。ボクはあいつの言葉を信用できていないのだろうか。親友を疑っている気がして、自分が嫌になる。

こんな、もやもやするのもあいつのせいだ。

早く学校終わらないかな……早く抱いて欲しい。休み時間毎にメッセージ入れてくれるのは嬉しい。過保護か。それとも、あいつも我慢できなかつたりするのかな？ そうだったら嬉しいな。

ようやく学人の学校が終わった。片手で学人にメッセージを返しながら、もう一方の手でポクはあそこを弄っている。

「ん……ふぁ……」

パンツの中に手を入れて指の腹で円を描くようにクリトリスを撫で回す。中から溢れた愛液で、下着にはお漏らししたかのような染みができていた。

「ん♥ あぁ……♥♥ 学人……♥」

学人がもうすぐ来る。抱いてもらえる。そう思うだけで、どんどん体が疼いて止まらない。下着変えなきゃとも思うけど、変えてもまた同じような状態になるだけだし。どうせ学人が来たら直ぐに脱ぎ捨てるしいいや。

欲しい。学人のおちんちん。自分で何度やっても、もやもやが消えない、届かない。セックス。射精。種付けセックス。

あいつは毎回ゴムを着けてくれてるけど、もし生でしりたいって言われたらどうしよう？ 断らなきゃ。生でして中で射精されたら赤ちゃんできちゃう。

「……中に精液出されるのってどんな感じなのかな？」

あいつの生チンコで、気持ちいいところをグリグリされて一番奥で出されたら、どうなってしまうのだろう？ あいつの子供を孕まされてポクはママにされちゃうんだ。

「ダメ……♥♥ ダメだよ、学人お……♥♥ ヤダ♥♥ ママはだめえ……♥♥」





指の動きが止まらない。おちんちんと同じくらい気持ちいいクリトリスを指でこねる。でも、物足りない。おちんちん入れられるのは、もっと気持ちいい。生で中に出されたら、もっと、もっと、気持ちいい？

「ヤダ♥♥♥ ヤダ♥♥♥ ヤダ♥♥♥」

ダメだ。断らないと。子供産むなんて怖いし、ボクたちだけの問題じゃない。でも……求められたら、断れるだろうか？

「やつ♥♥♥ ダメえ♥♥♥」

学人が望むなら、ボクは……

「んっ♥♥♥ やあ♥♥♥ 赤ちゃんできちゃうよお♥♥♥」

ちっちゃいお豆を指で押さえたり押し潰したり。ぐりぐりぐりぐり。

「学人♥♥♥ やつ♥♥♥ だめえええ♥♥♥」

頭が真っ白になる。

体がピクンピクンと痙攣して脱力する。股間からちよろちよろと漏れ出ている感覚。下着を貫通してシーツを濡らしていく……気持ちいい。体の奥のムズムズは消えないけど、これはこれで……

ベッドに仰向けで倒れ込む。乱れた呼吸を整えながら、何か忘れているような気がした。そのとき、遠慮がちに部屋のドアがノックされた。

「ぴいあ!？」

「そうだ、学人！」

「入るぞ」

「ま、ま、待って——」

ドアは無情にも開いていき。言い訳のしようもない惨状を目撃される。

「ち、違うんだ、これは……」

なんとか言い繕うとするけど、言葉が出てこない。いつから来ていたのだろうか。聞かれていたら最悪だ。うわごとで何を言ってたっけ!？」

「発情期だからだろ？ 気にするな」

「う……」

それはそうなんだけど、さっきしてたのは自分の中では少し違う気がして。でも、そんなことは言わなきゃわかんないから、余計なことは言わないけども。なんか、その……

「それより、そんな声聞かされたら、俺ももう我慢出来ないんだが？」

「え、えっ？」

服を脱ぎながら近づいてくる。

ふあっ……おっ……

「いいよな？」

ボクは屹立したペニスに視線が釘付けになったまま、コクコクと顔を上下に動かしていた。学人がやや乱暴に覆い被さってきて、ボクはベッドに押し倒される。強引にされる感じ、嫌いじゃない。お腹がキュンってなる。

あ、やっぱりゴムは着けるんだ。そりゃそうだよね、うん。

心臓が期待でバクバク音を立てている。やっつと、入れてもらえるんだ。まだかな、まだかな……？

「——っ♡♡♡♡♡」

来たあ♡♡

ずぷりと、一気に奥まで貫かれる。待ち望んでいた刺激に、それだけで軽くイってしまふ。

「大丈夫か？」

大丈夫じゃない。気持ち良すぎて壊れてしまいそう。まだ、始まったばかりなのに。これからどうなるの？ どうなっちゃうんだろ？ 壊れてしまふかも。やばい。学人に壊されちゃう。ぐちゃぐちゃに壊して欲しい。

学人はそんなボクを心配そうに見下ろしていた。

「大丈夫、気持ち良すぎるだけ、だから……お願い、続けて？」

ずぶずぶと引き抜かれて、再び奥を突かれる。

「♡♡♡♡♡」

体がどうしようもなく悦んでいた。深いところにジンジンと響いて止まらない。まるで、ジェットコースターに乗っているかのように翻弄される。振り落とされないように、目の前の大きな体にしがみつく。背中に手が回らないくらいの体格差を全身で感じて、その安心感に身を委ねた。

「ふあっ♡♡♡ はううう♡♡♡」

小刻みに体が震える。気持ちよさが落ち着く前に次の波が来て、留まることを知らない。

「ふあ♡♡♡ あっあっ♡♡♡ 学人♡♡♡ 学人♡♡♡ いいよお♡♡♡ あっあっ♡♡♡ はう♡♡♡ しゅきい♡♡♡ あっ♡♡♡ はう♡♡♡ しゅきい♡♡♡」

学人のおい、好き。広い胸に顔を埋めて嗅ぐ。ボクをダメにするにおい。今のボクは発情期だから、ダメになっていい……よね？

それから、何回？ したんだろ……

半分意識が飛び飛びになっていたからわからない。中で出される度に深く絶頂して、ふわふわと呆けている間にゴムが交換されて、再び学人のペニスボクの中に戻ってくる。

夢と現うつつの狭間をさまよっているうちに、いつの間にか意識を失っていた。



目を覚ましたのは、夜——だと思う。

カーテンの隙間からは夜の闇が覗いていたし、部屋の中は真っ暗だった。

ボクは学人の腕の中で眠っている。正確に言うとな学人の腕を枕にして胸に縋りついていていた。学人は家に帰らなくていいのかな、と一瞬思ったけど、そういえば、今日は泊まっていくなんて話をしたような気がするの、多分大丈夫なのだろう。前まではうちに泊まってくのは珍しくなかったし。一緒のベッドで寝るなんてことは無かったけども……いや、小さい頃はあったか。

「幸せそうな顔しちゃって」

顔を上げると大口を開けて眠る学人の顔があった。それがあまりに呑気で、幸せそうだったので思わず苦笑してしまう。

「ボクは悩んでるんだぞ？」

人差し指で頬をつんつんとつついてみる。眉がハの字になって表情が少し曇ったのを見て満足した。なんだか悩むのも馬鹿らしくなってきた。目の前の胸板に抱きついて目を閉じる。全身に疲労を感じて、やがて眠気がやってきた。今はこの心地よさに身を任せてしまおう。

翌日、発情期は終わっていた。